

単元名:ペルーとの繋がりから多文化共生を考えよう

氏名:竹辺 このみ		学校名:大津市立堅田小学校	
担当教科:5年生担任・外国語主任		実践教科:学級活動・道徳科・外国語科	
時間数:5時間	対象学年:5年生	人数:30人	

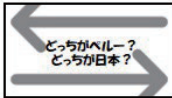
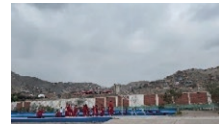
【実施概要】

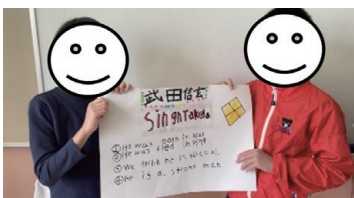
【1】単元のテーマ・目標 (評価の観点を意識して設定)		
日本とペルーの移住史を通じ、文化理解を深め、外国人としてではなく「ひとりの人」として平等に接する素地を養う。		
【2】 単元の評価 規準	(ア) 知識・技能	歴史的にペルーと日本に繋がりがあることを理解している。
	(イ) 思考・判断・表現	ペルーと日本の似ているところや異なるところに気づき、日本との歴史的な繋がりについて適切に表現している。
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	外国籍の転入生が来た時に、自分にできることを主体的に考えている。
【3】 単元設定の理由	【単元設定の理由】 本校は、全校児童約1000人が通う大規模校であるが、地域柄外国籍児童の割合はかなり少ない。そのため、外国人と触れ合う機会も少ないという現状がある。児童は授業を除くとインターネットの情報や人から聞いた情報などで、外国について知る機会を得ているように感じる。「もしも、今私たちのクラスに外国に繋がる児童が転入しても、文化の違いを受け入れ、相手を尊重できる人になってほしい」という思いでこの単元を設定した。 【児童観】 本学級の児童は、学級の友達の良いところをたくさん見つけられる児童が多い。学級の中でも様々な考え方や性格の違いがあることを理解しており、人の立場や気持ちを考えて、声をかけたり、行動することができる。また、外国語の学習において、世界の食べ物や世界の名所の写真などが取り上げられる際、非常に関心を示しており、「いつか海外に行きたい」という思いをもつ児童もいる。国語科とSDGsを関連させた学習や社会科の学習で「世界の食卓」でフォトランゲージを行ったり、「貿易ゲーム」を経験したりして、少しずつ外国への関心は高まっている。一方、児童の捉えでは、「自分とは別の国」という認識が強く、共生にまでは至っていない。外国人と接する機会が少ないがゆえに、「○○人」にこだわってしまうことや、「○○の国は貧しい」「○○の国のものはかわいい」など限られた情報で、世界での物事を切り取ってしまうことがある。 【教材観】 滋賀県では外国籍人口は年々増加傾向にある。国籍別でみると1位がブラジル、2位がベトナム、3位が中国、4位が韓国・朝鮮である。地域によっては外国籍児童が多く在籍する学校もある。県内においても外国人を見かけることが増えているが、関わりがないため「外国人」とひとくくりにしてしまうこともあるだろう。本単元では、多文化共生に繋がる様々な教材を取り入れ、児童が主体的に学ぶ活動を行う。現在だけを見るのではなく、過去(歴史)、現在、未来へと今後も繋がりをもてるように、歴史的背景について学んだ上で、現在ペルーで生きる日系校の児童とのビデオ交流を行う。「人」と繋がることで、「○○人」という捉え方ではなく「ひとりの人」として外国人と接することができるようになることをねらいとする。	
✓ 児童/生徒観 ✓ 教材観 ✓ 指導観 ✓ 設定時に 想定された 児童・生徒の 変容		

【指導観】

本単元では、児童から事前に集めた「ペルーについて知りたいこと」について、教師が撮影したペルーでの写真をもとにフォトランゲージで答えを見つける活動を行う。その後、日本とペルーの歴史的な繋がりをフォトランゲージで考えていく活動を通して、移住の歴史に触れる。その際にJICA横浜の海外移住資料館で撮影した写真も活用する。移住の歴史があつてこそ、現在の日系外国人人口の増加に繋がると考える。ひょうたん島問題「あいさつがわからない」では異文化やマイノリティーを経験し、海外に移住した日本人や海外から日本に来ている外国人の気持ちを考えられるようにする。また、「ディエゴの物語」を通して、マイノリティーの気持ちに思いを馳せたり、異文化を受け入れるために大切な気持ちについて考える。ペルーの日系人学校との交流も行い、「ペルー」とにとどまらず、「ペルーで生きる人」との繋がりを感じられるようにする。

【4】展開計画(全4時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 学活	日本とペルーの繋がりを 見つけよう。  	・「どっちがペルー？どっちが日本？」 ペルーの写真と日本の写真を比べて、どちらかを予想し、ペルーに日系社会があることを知る。         ・日本人が移住していた歴史・現在もその子孫にあたる日系人がペルーで生活していることについて知る。 ・児童から研修前に集めた「ペルーについて知りたいこと」の答えを班でじっくり写真を観察しながら見つけていく。 ①ペルーで有名なところは？ →マチュピチュ・ナスカ ・マチュピチュの初代村長は日本人 ・日本が最先端で研究を進めるナスカの地上絵 ②おいしい料理は？ →セビーチェ(魚介)・パパアラワンカイナ(じゃがいも)・ポジョアラブラッサ(鶏)・ロモサルタード(牛肉の野菜炒め)など ペルーはじゃがいもの原産地である ③ペルーの大統領は？ →ディナ・ボルアルテ(女性初) 今年11月に佳子様が訪問された ※過去にはアルベルト・フジモリ(日系人初) ④ペルーで起こっている問題は？ →犯罪:スマートフォン 1日4000台盗難 →防災:ミ・ペルー区の現状	ペルーで撮影した 写真など      

		⑤何をして遊んでいる? →縄跳び・卓球(日系校ならではの) 児童らの質問に対するペルーの子どもの回答 ⑥ペルーと言えば? という質問に対しては、「すごく素敵な国」「人が優しくて、サービス精神旺盛」「食べ物と景色がきれい」という回答があったことを知る。 ⑦日本に来たら何をしたい? という質問に対しては、「サッカー選手に会いたい」「学校の行事を見たい」「日本料理を食べたい」という回答があったことを知る。	
2 道徳科	海外へ移住した日本人(マイノリティー)の気持ちを考えよう。  ↑ 自ら地図帳を出して考える児童の様子 	・JICA横浜 移住資料館のPASSPORT(児童向けパンフレット)の中にある「この漢字、何て読むの?」を班でクイズ形式で行う。 この活動で、生きていくために日本から様々な国へ出稼ぎ移民として移住していた歴史を知る。 ・どんなもののトランクに詰めていったか予想する。 ・実際にいくつかの写真を見て、持って行ったものを考える。 ・どんな気持ちで海を渡り、どんな思いで生活していたのか考える。	JICA横浜 移住資料館PASSPORT (児童向けパンフレット)  JICA横浜 海外移住資料館で撮影した写真 
3 外国語科	ペルーの子どもたちに日本について伝えよう。(動画撮影)  ↑ Picture dictionary(単語帳)を見ながら給食の伝え方を考える児童 	・ラ・ウニオン校の子どもたちに向けて日本や私たちの学校について伝えたいことを出し合う。 ・スペイン語の簡単な挨拶を練習する。 ・これまで習った外国語(英語)を使いながら、わかりやすく伝えられるように練習する。 ・児童が伝えたい内容について動画を撮影する。 日本のお菓子紹介  「びわこ池」紹介  休み時間の過ごし方(大縄・ドッジボール)  好きな人物紹介	

4 学活	ペルーの子どもたちからペルーについて学ぼう。	・ペルーから日本に届いた動画を見て、日本と似ているところや異なるところについて考える。	ペルーからの動画
児童の感想 ・日系人のさとしさんの日本語がペラペラでびっくりしたし、すごいと思った。 ・日本の文化が尊重されていて、うれしい。 ・ぼくよりも習字の「成長」という文字が上手でびっくり! ・日本で「ドッジボール」というものがペルーでは「マタ・ヘンテ」といい、すごく似ていた。 ・キャリーケースで登校していたり、送迎してもらったりしてうらやましい! ・日本語や日本文化を習う教室があって、日本とペルーの絆を感じました。 ・ダンスがノリノリでとても楽しそうでした。 ・小学2年生で「幸せなら手をたたこう」を日本語で歌っていて本当にびっくりしました。			
5 道徳科 本時	自分と異なる文化を持つ人と共に生きていくために大切な気持ちを考えよう。	・「ひょうたん島問題」の「あいさつがわからない」のアクティビティを行い、異文化を体験する。 ・同じ文化の人と出会ったときの気持ち・異なる文化に出会ったときの気持ちを考える。 ・現在、日本人の子孫である日系ペルー人・日系ブラジル人が日本に移住してきていることを知る。滋賀県の外国人人口統計を読み取る。 ・ディエゴ(日系ブラジル人)の物語をもとに、ディエゴの気持ちについて考える。	新版シュミレーション教材「ひょうたん島問題」明石書店 まんが「クラスメイトは外国人―多文化共生20の物語―」明石書店
【5】本時の展開			
過程 時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (15分)	・アクティビティ「あいさつがわからない」を行う。 2021(令和4)年12月末現在 国別外国人人口 ブラジル 26% ペルー 22% 日本 2% インド 4% アメリカ 1% カナダ 1% メキシコ 1% その他 4%	・「ひょうたん人」「カチコチ人」「パラダイス人」のそれぞれの民族の特徴が書かれた紙を一人一枚配布する。周りの人には見せないよう伝える。 ・それぞれの民族になりきり、あいさつタイムをとる。 ・感想を共有し、同じ文化の人と出会ったときの気持ち・異なる文化に出会ったときの気持ちを考える。 (ひょうたん人:マジョリティー パラダイス人:マイノリティー)	新版シュミレーション教材「ひょうたん島問題」明石書店
	・滋賀県の外国人人口統計を読み取る。	自分と異なる文化を持つ人と共に生きていくためにできることを考えよう。 ・滋賀県には多くの日系ブラジル人・日系ペルー人が生活していることに気づかせる。	

展開 (15分)	・ディエゴの物語を読む。	・日系ブラジル人の転入生ディエゴ君のマンガから、転入当初の状況と、少したってからの状況を確認する。 ・ディエゴさんの気持ちを考えさせる。 (外国人が日本の文化の中で生活する難しさ) ・日本人も外国人も共に自分らしく生活するために大切なことは何か付箋に書かせ、交流タイムをとる。	まんが「クラスメイトは外国人—多文化共生20の物語—」明石書店
まとめ (10分)	・もし外国人が転入してきたら、自分たちに何ができるか発表する。	・ワークシートにこれまでの学習をふまえて、これからの自分にできることや外国人と共に生きるために大切なことについて考えさせる。	

【授業実践の様子】

【あいさつがわからない】

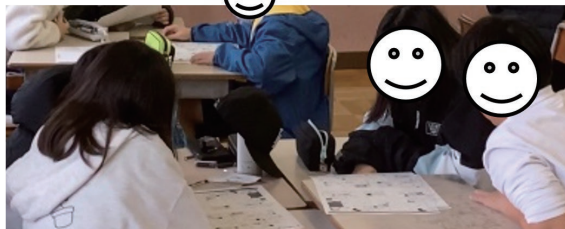


同じ挨拶で盛り上がる
「うれしい」「楽しい」



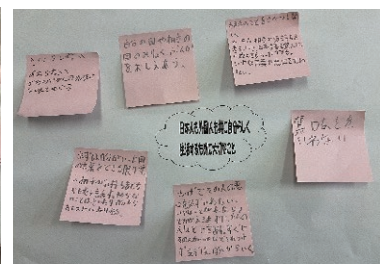
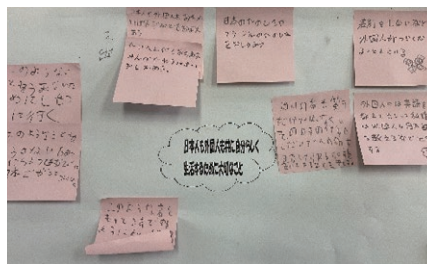
私の民族とは挨拶の仕方が違うよう...

【ディエゴの物語】



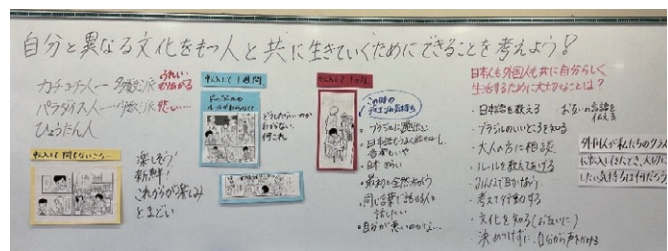
ブラジル人の転校生ディエゴ君が転入して間もない頃→転入して一週間→転入して一か月の3つの時点について、ディエゴ君の周りの児童の様子やディエゴ君の気持ちについて考えました。

【日本人も外国人も共に自分らしく生活するために大切なことは？】



「相手の気持ちを考える」「自分の国や相手の国の魅力や文化を教え合う」「外国人だからって決めつけない」「自分が外国語を覚える」など様々な考えがでてきました。

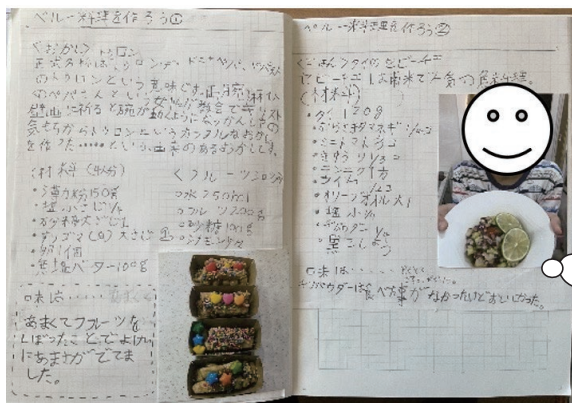
【意見の発表】



【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

外国とか全然違うかなってけど学習を学んで少しきょうふがわいとなしペルーの食事もとまりなりました。

これまで私は「外国の人はこわいだろうな」と思っていました。けど勉強していろいろにそんな気持ちはなくなっていきました。前の気持ちとまは人たいて「外国人の人はやさしいかな」という気持ちになりました。私は「たいてにそうぞうだけできめつてはいいないな」と思いました。



事前アンケートで「外国の文化や外国人についてあまり興味がない」と回答した児童がどう変容するかを自身の中で課題としていた。実際に単元を通して、少し意識が変わったように振り返りから読み取ることができる。これからも自分と異なる文化に触れることに抵抗を示すのではなく、興味を持ったり、受け入れたりできるようになることを望んでいる。

まずはペルーを知ることから授業を構成したことで、ペルーに親しみをもつ児童が多く見られた。

学習後、自主学習ノートに
ペルーやスペイン語について調べたり、
実際にペルー料理を
体験する児童も…!

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

(授業前)

授業者のペルーへの研修は児童に伝えた上で、授業前にペルーという国のイメージを児童に問うと、「家族がいっぱい・明るい・笑顔・楽しそう・地形が細い」など肯定的な言葉が挙げられた。ペルーでの言語を自主学習ノートに調べてきたり、学習の中でペルーが取り上げられると反応している様子もあった。一方、日常会話から児童は自分が知り得た情報で、「○○の国は○○なイメージ」「○○人は○○な性格」など一面的に捉えているように感じる。

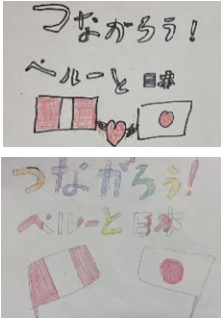
(授業後)

ペルーと日本のつながりを知って、自分とは関係ないものという意識を変えることができたように思う。歴史的な繋がりや、文化を「知る」ことを通して、授業を進めるごとに児童の前向きな気持ちの高まりがみられた。また、単元の最後には自分事として考える中で、「外国人」ではなく「ひとりの人」として接するという視点を与えることができた。

【8】自己評価

1. 苦労した点

- ・ペルーでの学びを、まず何の教科で実践するのかに非常に悩んだ。
- ・授業者が児童に伝えたいことと児童が知りたいと思うことにズレが生じないように、様々な教材や過去の実践例を参考に授業を練った。
- ・いかに児童が自分事として捉えられるか考え、実態に合わせて体験的なゲームを取り入れた。

2. 改善点	・ペルーだけでなく、他の国の文化を紹介したり、体験したりすることで、より、多文化に触れることができたと考える。 ・ペルーで生きる人の生活を読み取れるような写真を用いて、フォトランゲージができるとよりよい。 ・もし総合的な学習の時間として時数を確保できれば、単元の終末に向けてできることの可能性が広がる。
3. 成果が出た点	・実態に合わせて、クイズやゲーム的な教材を取り入れたり、マンガで道徳科の学習を行ったことで、児童が楽しみながら学ぶことができていた。 ・滋賀県に住む外国人について紹介したことで、外国人と将来関わる可能性を視野に入れて学習に臨むことができていた。
4. 備考(授業者による自由記述)  ↑ ふりかえりカード 綴じの表紙	○教師海外研修の報告会 勤務校にて、研修での学びを共有させていただいた。報告会を機に、開発教育や多文化共生について自身が取り組んでいることや外国籍の少ない学校であるがゆえに、自身が取り組んでいきたい多文化共生への課題について伝えることができた。これからは一人ではなく、興味を示してくださった先生方と多文化理解・多文化共生に繋がる授業を考えていけるとうれしい。 ○本時の授業実践の公開 勤務校では年度内に一回、一人一授業を公開することになっており、校内の先生に参観していただいた。参観してくださった先生から、『「あいさつがわからない」のゲーム、私のクラスでもしてみたい』や『ディエゴの物語を道徳でやりたいんだけど、まとめはどうしたらいいかな』などの声があった。今ある優れた教材を先生方に知っていただけたことで、多文化共生を伝える授業に取り組む壁が取り除けたと思う。

参考資料:

- ・新版シュミレーション教材「ひょうたん島問題」明石書店
- ・まんが「クラスメイトは外国人ー多文化共生20の物語ー」明石書店
- ・2022年12月末現在滋賀県の国籍別外国人人口 滋賀県国際協会
- ・JICA横浜 海外移住資料館児童向けパンフレット PASSPORT